歴史地理学　47－2（223）24～41　2005.3

吉田東伍の歴史地理学とその後継者

川　合　一　郎

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．東伍の歴史地理学の特質
　(1) 歴史地誌的方法
　(2) 社会経済史的方法
　(3) 考証史学的方法
Ⅲ．東伍の教育活動
Ⅳ．後継者に関する考察
　(1) 西村眞次
　(2) 蘆田伊人
　(3) 高橋源一郎
　(4) 横井春野
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

吉田東伍は，明治から大正にかけて，独自の歴史地理学や歴史学を形成していった異色の在野学者である。東伍は幕末の元治元年（1864）に越後国蒲原郡保田村（現新潟県阿賀野市保田）に生まれ，大正7年（1918）に千葉県銚子で亡くなるまで，『大日本地名辞書』をはじめ『倒叙日本史』『日韓古史断』『利根治水論考』など数多くの著作を残している。

東伍逝去時，日本歴史地理学会の重鎮であった岡部精一は，「君は天成の歴史地理家なり」とし，「彼の大日本地名辞書は歴史地理学の泰斗として君を永遠に不朽ならしむるの記念碑たらん」[1] として，その業績を讃えている。東伍の業績は歴史地理学だけにとどまるものではないが，その中心的な研究領域が『大日本地名辞書』に代表される歴史地理学であったことは間違いない。

このように前アカデミー地理学期と称される時代[2] に大きな足跡を残した東伍であるが，その学問を受け継いだ後継者は少ないといわれる[3]。しかし東伍は，明治34年（1901）より東京専門学校（翌年早稲田大学と改称）で教鞭をとっており，後継者を育成し，さらには「学派」を築く制度的条件は備えていたと考えられる。この後継者や学派に関する問題は，東伍の全体像を明らかにする上で重要であるにもかかわらず，これまで詳細に検討されてこなかった。

ところで，わが国では明治中期から大正にかけて，東西の両帝国大学を揺籃の地として歴史地理学の学派が誕生した。まず特筆すべきは，明治20年（1887）に（東京）帝国大学文科大学に着任した外国人史学教師ルードウィッヒ・リースの存在である。リースは日本の「史学的地理学」の必要性を説き，その影響を受けた国史科の卒業生や在学生らが中心となって，明治32年（1899）に日本歴史地理研究会（後に日本歴史地理学会と改称）を設立した[4]。一方，日本歴史地理研究会の設立メンバーの1人であった喜田貞吉は，明治41年（1908）に講師として赴任した京都帝国大学文科大学史学科において，地理学講座の

キーワード：吉田東伍，歴史地理学，早稲田大学（東京専門学校），後継者，学派

小川琢治や石橋五郎とともに多くの歴史地理学者を育て，同大学を核とする歴史地理学研究の伝統を生み出した[5]。

本研究では，これら２つの歴史地理学派と並んで，東伍の歴史地理学の方法を共有する後継者群，すなわち学派[6]が果たして存在したのかどうかを明らかにする。そのために，まず東伍の歴史地理学の特質に着目する。この点については，これまでも結城[7]，千田[8]などにより研究がなされてきたが，いまだに十分な研究蓄積があるとはいい難い。そこで，本研究は既往研究に導かれつつ，その方法的特質についての新たな整理を試みる。次に，東京専門学校・早稲田大学における東伍の教育活動の検討を通じて，その歴史地理学の伝達過程を明らかにする。その上で，教育を受けた者のなかに，東伍の歴史地理学を継承する有力な後継者がいたのかどうかを考察する。以上の作業により，東伍の学派の存否が明らかになると考えられるが，このことは同時に，わが国における地理学の分野ではあまり試みられなかった学派研究に資するものと思われる。

Ⅱ．東伍の歴史地理学の特質

東伍には実証的な歴史地理学的著作や論考は多数あるものの，理論や方法論に関する体系的研究がほとんど見られないことは，これまでしばしば指摘されてきた[9]。したがって本研究では，東伍の実証的研究のなかから学問的方法に関する言説を探索し，それを通じて，東伍の歴史地理学の特質を明らかにしていきたい。このことは，後継者と思われる人物との方法上の異同を探るための重要な前提作業になると考えられる。

(1) 歴史地誌的方法

結城は「博士の歴史地理学に関する多くの論考は，いずれも地誌に属したものが多い」と述べ，その特質の１つを「地誌的方法」としている[10]。まずこの点について，東伍の言説を踏まえつつ検討したい。

明治43年（1910）の講演録「江戸の歴史地理」は，東伍の歴史地理学観が比較的まとまって示された論考である。東伍はこのなかで，歴史地理学の研究領域を「人事と場所」と規定した上で，その研究意義を次のように述べている。

> （前略）歴史地理と致しましては，特別な時代に於て各地方で以て特殊の有様のあったことを説明することが（中略）重要になって居ると思ひます。[11]

すなわち歴史地理学を，ある特定の時代における各地の地域性を究明する学問であると位置づけている。

同時に東伍は，地域を過去の一断面において把握するのみならず，時代とともに変遷発達する存在として動態的に研究しようとしている。東伍は，次のように述べる。

> 江戸の極めて古い時代から，その後の各時代，並に此江戸だけに起った特殊の重要の歴史，乃至特殊の地理変遷を眼目として研究し，又注意をせねばならぬ（以下略）[12]

ここでは「江戸」という地域が，歴史の移り変わりとともにいかなる変遷をしたのかを究明する必要性を強調している。この姿勢は『大日本地名辞書』序言にも見られる。東伍は同書の記述対象を「海陸の形状，古今の変遷，事物の興廃等，凡，事の其地に起り，其地に係」[13]る事象であると記しており，土地や地域とそれに関わる事象の歴史的変遷に着目しているのである。

このような地域の歴史的変遷に関する研究は，現在の地域を理解することをめざすものでもあった。例えば「加治川の変遷」では，「私は今当地方の郷土地誌の一端である所の加治川並に紫雲寺福嶋両潟の変遷に就て述べんとするのであります」とした上で，それらが「如何なる変遷を経来て今日の状態を成し

たるや」[14] とし，現在の郷土を理解する一助として，加治川の変遷と流域の開発史を明らかにしようとしている。この視点は，とりわけ治水・開発の歴史地理によく見られる。

以上のように東伍の歴史地理学は，過去の地域の性格とその変遷を解明する歴史地誌であり，それは現在の地域の理解に結びつくものでもあったといえる。東伍の代表的著作『大日本地名辞書』全11冊（増補版全8巻）は，このような「地域」研究の積み上げの結果として成立した，「国家」の歴史地誌であると位置づけられる[15]。

一方で東伍の歴史地誌は，郷土史・地方史と深い連続性を有しており，その間に明確な境界線がないことが多い。例えば大正5年(1916) 年8月に愛知県豊橋で行った日本歴史地理学会の講演「奈良平安朝時代の尾参遠地方」では，その目的を「日本全体の観察」ではなく，「特に三河地方，乃至東海地方に於ける其当時の日本の中の部分の歴史（傍点は原文のまま）」[16] の解明であると述べている。この「部分の歴史」は，歴史地理を意味していると考えられる。また「新田郡の治水墾田」においても，「(事物に存在する道理は—筆者注）大きくしてみれば，日本の歴史にあらはれ，小さく見れば関八州の歴史になり，或は更に小に上野国新田郡の歴史地理」[17] になると述べており，郷土史・地方史とほぼ同義に扱っている。東伍は歴史地理学を，地域とその変遷に関わる学問であると考えていたが，地理学の一分野であるとは明確に意識していなかった可能性もある。したがって東伍の歴史地理学は，郷土史的・地方史的な性格をあわせもつ歴史地誌と位置づけることができる。

(2) 社会経済史的方法

また東伍の研究には，今日の歴史分野でいえば社会経済史に近い視点が随所に見られる。それが東伍の歴史学・歴史地理学の特徴となっていることは，これまでも指摘されてきたところである。例えば渡辺は，現代から過去に遡るという，斬新な叙述形態をもつ『倒叙日本史』について，「わが国の社会経済史研究に先鞭をつけたものとして学史的にも重要」と高く評価している[18]。歴史地理学についても佐藤は，東伍の遺著『日本歴史地理之研究』の収録論文のなかに，社会経済史的な論文が多いことを指摘している[19]。

ここでは東伍の歴史地理学と社会経済史的視点との関係について，「郷土の研究」および「歴史上より比較したる房総半島の地力」を事例に論ずることとする。まず「郷土の研究」において東伍は，「郷土の研究と言ふことは，吾々に取って可なり，必要な事であらう」とし，その研究の多くは「歴史地理的」なものであると指摘する。その上で，次のように述べる。

> （前略）歴史地理的の研究が行はれてあることは，過去の文明を知る上から言っても，人文発達の説明として見る点からしても，非常に必要であり有益な事であるが，其の裏面には必ず産業的発達と言ふものが無くてはならぬのである。[20]

東伍は，従来の歴史地理研究の多くが名所古跡，神社仏閣などについての項目羅列的な研究に陥り，結果として事象の表層にのみ目を奪われてきたことに批判の目を向ける。その上で，「文明」を作ったのは各種産業であるとし，それらの史的研究が，「文明」ひいては「郷土」を明らかにする上で不可欠であると強調している。

このような観点は，「歴史上より比較したる房総半島の地力」にも明瞭にあらわれている。「一の半島状を成すものは，古今その形勢依然として存在する」として，与件である自然的条件は古今相変わらないとする。その上で，次のように論じている。

> 地力はすべて人間の利用と厚生に待つ所以であるから，（中略）世の進歩につれ

て商業や工業が盛大になれば，従前の農業や漁労をのみ産業と心得られた時代とは大に違ふ。又，水陸船車の交通や，資本財力の集散の形勢も大に土地の情況を変化せしむるのである。[21]

東伍が注目したのは，土地の意義はそれを利用する人間の経済段階に応じて変化するという点である。房総半島についていえば，農漁業が支配的であった時代から商工業，交通などが発達する時代に推移するにつれて土地のもつ意義が変化し，それに伴って地域も変貌するとしている。

しかしこの視点も，時代の思潮を色濃く反映したものであった。東伍は「是等の理論は，謂はゆる経済方面に於て，それぞれの学者が毎々喋々して居るから，歴史地理の方でも之に関連して考ふるは，当然の事である」[22]と述べている。それは，この時代に成立期・発展期を迎えた日本資本主義が生み出した歴史観でもあった[23]。

また，東伍の歴史地理学の特質として指摘しなければならないのは，その研究が考証史学的な方法により行われたということである。次節において，この点を明らかにしたい。

(3) 考証史学的方法

東伍の『日韓古史断』などを論じた中村は，東伍の歴史学の特質を「史料・資料の博捜」に基づく考証史学であるとしている[24]。考証史学とは，厳格な史料操作に基づいて史実を解明しようとする実証主義的な史学方法論であり，明治史学の一大潮流であった[25]。東伍もこの潮流に身を投じていたと考えられる。

東伍はこの考証史学的な方法を，歴史地理学においても用いている。例えば前述の「江戸の歴史地理」において東伍は，「歴史地理と云ふことに就いて先注意すべき事柄は古い書物と古い跡とであります（傍点は原文のまま）」[26]と述べており，文献による考証を重視していたことがわかる。また『大日本地名辞書』の執筆に際しては，難儀を極めながらも精力的に文献収集を行っており，例えば壱岐国ではその引用文献が44種，信濃国では98種に及んだ[27]。福井は同辞書について，「博引旁証，幾多の古記録・古文書を以て証論」した「文献史学的研究」であったとしている[28]。

このように東伍は文献史料に基づく考証を重んずる一方，現地調査を含む旅行はあまり行わなかったといわれる。例えば門弟の横井春野によれば，横井が史学科１年の時に，東伍らと箱根へ旅行した際の思い出を述べたなかで，「地名辞典の著者である先生も，案外に旅行はしてをれなかった。箱根を歩かれたのは，此れが初めてであったと云うてをられた」[29]と述懐している。また東伍は『利根治水論考』についても，利根川下流を実見しないまま書いており，東伍が死の直前に利根川河口部の銚子を転地療養先として選んだのは，利根川の下流が見たいという宿望があったためといわれている[30]。

東伍も，自身の歴史地理学が主に文献史料に基づいており，現地調査によらないものであることを自覚している。日本歴史地理学会の地方講演会などの際には，聴衆が地元民ということもあり，かなり謙虚な言辞が見られる。例えば明治44年（1911）８月の群馬県太田での講演では，当地の訪問ははじめてであることを断った上で，事前に書物などで推論は尽くしてきたものの，講演内容は「紙上の空論で実際と甚矛盾したこともあらう」[31]と述べている。また，大正５年（1916）８月に名古屋で講演を行った際，次のように述べている。

（前略）名古屋に立寄った事は三四回計り僅見物した位で，（中略）日夜，室内に燻って，古今の人々の書いたものゝ上で見た事を取集め，此にお話するので，

或は飛んでもない見当違ひを致す事もあり，或は一場の滑稽になるかも知れません（以下略）[32]

東伍がこのように述べた背景には，『大日本地名辞書』が大きな反響をもって迎えられた反面，さまざまな誤謬を指摘され，一部批判もなされたという事情もあったと考えられる[33]。

しかし東伍は，実地調査を全く行っていなかったわけではない。前述の「古い書物と古い跡」の「古い跡」とは，遺跡遺物や伝説，口碑などのことであるが，これらは現地で収集することも想定していたと思われる。このことは，東伍自身の記述からも裏づけることができる。例えば大正元年（1912）に発行された『入間郡誌』に寄せた序文に，「予は去年河越に遊びて，該郡の勝跡を訪ひ遺事を聞き，其古今の大略を得たり。則ちますます地理と人事の相待ちて盛衰因果する所あるを覚り，感慨之を久しくす」[34] と述べており，実地調査の意義を認めていたことがわかる。

以上のように東伍の歴史地理研究は，文献史料を図書館や各種所蔵元などで集められるだけ集め，それに基づいて考証・論断するという，インドアワークを主体とするものであった。その上で，現地調査を行い，地元に残る史資料の収集や遺跡遺物の調査，さらに地元民から口碑伝承などのヒアリングを行うことを想定していたと考えられる。しかし，この現地調査については時間的・経済的制約から果たされないことが多かったと思われる[35]。

次章においては，以上の特質をもつ東伍の歴史地理学が，どのような教育活動を通じて門下に伝達されていったか，その伝達過程について検討したい。

Ⅲ．東伍の教育活動

東伍の教育活動については，次の2つに分けることができる。1つは，明治16年（1883）から同17年（1884）までの新潟県中蒲原郡大鹿小学校と同20年（1887）から同22年（1889）までの北蒲原郡水原小学校における，いわゆる初期教員時代である。もう1つは，明治34年（1901）から大正7年（1918）までの東京専門学校・早稲田大学[36] における教員時代である。ここでは，学問的な後継者について議論するという目的を踏まえ，「教育活動」を後者の東京専門学校・早稲田大学時代に限定して用いることとする。

これまで東伍の教育活動については，その評伝または早稲田史学の系譜研究のなかで触れられるにとどまり，その全体像を示したものは皆無である。しかし大学教育の場は，東伍が自身の歴史地理学や歴史学を後継者に伝える，最も効果的な場であったに違いない。本章では，東伍の教育活動について，その所属部科や担当した講義科目，および講義内容について検討する。

東伍は明治34年（1901）5月に，東京専門学校文学部史学及英文学科の講師[37] に就任している。東伍が所属した史学科系は，明治30年代初頭から大正にかけてめまぐるしく組織改組を行い，それに伴って東伍の所属も変遷していく（図1）。東京専門学校にはじめて史学科系の組織「文学部史学科」が設置されたのは明治31年（1898）9月である。当時の同校の学年度（9月から翌年8月まで）でいえば，明治32年度にあたる[38]。史学科は翌年度，史学及英文学科に再編され，早稲田大学と改称された明治36年度には，専門部歴史地理科に編成される。さらに翌37年度には高等師範部が設立され，専門部歴史地理科は高等師範部歴史地理科に移管される。明治41年度になると高等師範部歴史地理科は大学部に統合され，大学部師範科の歴史地理科に編成された。この師範科歴史地理科も，翌42年度に文学科史学科と改称される。その後文学科史学科は，再設置された高等師範部の歴史科へ再び編入されるものの，大正4年度には大

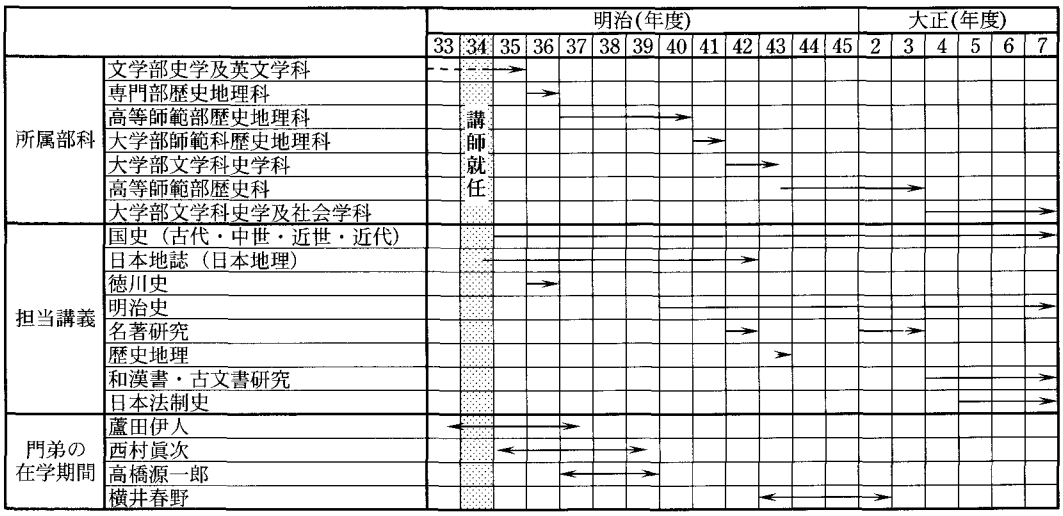

図1　東京専門学校・早稲田大学における吉田東伍の教育活動と門弟の在学期間

注1）明治35年(1902)9月(明治36年度)に東京専門学校から早稲田大学へと改称。
注2）年度は、当時の学年度（9月から翌年8月まで）に対応。本文注38)参照。
注3）高等師範部歴史科は、正式には国語漢文及歴史科・英文及歴史科の2学科のことであるが、ここでは便宜的に歴史科とした。
資料：担当講義については、早稲田大学大学史資料センター所蔵の「教員担任課目・学科配当表」（早稲田大学文書5-17-13～同5-52-145)による。ただし明治34・35年度は本文注45)208～211頁，同39年度は石山昭次郎「明治後期における早稲田大学の教員と担任課目―明治三十五年九月より明治四十二年八月まで―」，早稲田大学史記要9，1976，94～102頁を、それぞれ参照した。
所属部科・門弟の在学期間については、本文および本文注を参照のこと。

学部に復帰し，史学及社会学科という名称になっている[39]。

このような史学科系組織のたびかさなる変転の背景には，その当時歴史学・地理学の研究者を志す学生が少なく，学校側としても中等教員の養成を主眼とした学科編成をせざるを得なかった事情があったとされる[40]。いわば師範教育のあり方に対する試行錯誤が，その変転の最大の理由であった[41]。このあたりの事情について，明治30年代前半に在籍した，後の憲政史家の渡辺幾治郎は「当時の主目的は中等教員の養成で，（中略）我々の時代は学者は余り出なかった」[42] と述べている。当時の東京専門学校・早稲田大学史学科系の教育が中等教員養成を主眼にしていたことは，後ほど検討する門弟の蘆田伊人・横井春野が，一時期中学校に在職していた事実と考え合わせると興味深い。あわせて当時，専門研究を志す学生が少なかったという事実は，東伍の後継者を検討する上で考慮に入れておく必要がある。

また，東伍が講師に就任した明治30年代前半の史学科系の状況について，同じく渡辺は「史学と地理学とを並行的に課し，その相互関係を学術的に教授しようとしたところがねらいでした。（中略）学校でも地理に大に意を用いたらしく，（中略）歴史的地理学というか，地理歴史の相互関係とその発達を説くつもりらしかった」[43] と回顧している。明治30年代の史学科系に属する地理教員の顔ぶれを見ると，東伍の他に，後述する喜田貞吉や志賀重昂，山上萬次郎，矢津昌永，田中阿歌麿，横山又次郎など，当代一流の歴史・人文・自然地理学者が名を連ねており[44]，学校側が歴史学のみならず地理学教育をも重視していたことがうかがえる。

ところで，明治34年度から大正７年度までの史学科系組織において，東伍はどのような講義科目を担当していたのであろうか。実は東伍は，講師就任以前の明治30年度から同32年度まで，文学部の科外講師を務めている[45]。しかしこの間の講義科目を示す資料が管見の限り見当らないため，ここでは検討の対象外する。東伍が講師となったのは，文部省に就職した前任者喜田貞吉の推薦を受けてのことである[46]。そこでまず，前任者である喜田の講義科目を検討する。

喜田が東京専門学校講師として着任したのは明治33年（1900）１月である。東京専門学校に提出された喜田の「履歴書」[47]を見ると，東京帝国大学大学院にて「『日本歴史地理特ニ畿内及其附近地方』ナル事項ニ就テ攻究中」とあり，日本の歴史地理が専門であることを記している。また同じく，東京専門学校より文部大臣に提出された喜田の「教員認可願」[48]によれば，「今般私立東京専門学校文学部ニ於テ地理学講義担任仕度候」とあり，喜田の扱いは地理学教員であったことが判明する。喜田の講義科目について「各科課目一覧表　三十二年九月」[49]によれば，１月より文学部史学及英文学科第一年級において，八木正衛の後任として日本地理総論を週２時間担当している。喜田は同34年（1901）５月まで在職し，同月文部省に就職している。

明治34年（1901）５月における東伍の「教員認可願」[50]を見ると，「今般私立東京専門学校文学部ニ於テ地理学講義担任仕度候」とあり，それ以外の箇所についても，前述の喜田の認可願と全く同一である。おそらく定式的な文書であったためとは推測できるが，いずれにしても東伍は当初，地理学の教員として東京専門学校に迎えられていることは，この後の変遷を考えると興味深い。なぜならば，明治41年（1908）12月に東伍が博士号授与のため博士会に提出した「履歴書」[51]によれば，東伍は自ら「明治三十五年私立早稲田大学講師に嘱托せられ国史講座担任」と記し，担当を「国史」としているからである。すなわち地理学教員の喜田の後任であった東伍は，その後歴史学教員へと立場を変えているのである。このことは，次に述べる東伍の担当科目の推移と大きな関わりがある。

東伍が講師に就任した明治34年度の「東京専門学校　明治三十四年度報告」[52]には，喜田の日本地誌総論と並んで，東伍の日本地誌（地方誌）が見られる。また，翌35年度の講義科目を見ると，文学部史学及英文学科第一年級において日本地誌を１科目（週２時間）担当するとともに，第三年級で国史を１科目（週２時間）担当している[53]。ここではじめて，東伍の担当科目に国史が登場する[54]（図１）。しかし明治36年度では，日本地誌が１科目（週２時間）のままであるのに対し，国史は３科目（週８時間。ただし徳川史１科目週２時間を含む）に増えている。その後も国史関連は，毎年３科目から４科目配当されているのに対し，地理関連は1科目にとどまっている[55]。明治44年度になると，担当から地理が消えて国史関連の科目のみとなり[56]，東伍が名実ともに歴史学教員となったことを示している。その状況は，東伍が急逝した大正7年度まで続いている。以上の推移を考えると，東伍は就任当初はともかく，基本的には国史系教員として学校側から遇されていたと推測せざるを得ない[57]。したがって多くの学生にとって，東伍との接点は地誌や歴史地理の授業よりむしろ，国史関連の授業であったと考えられる。

最後に，東伍の講義の様子や内容について検討したい。残念ながら地誌や歴史地理の授業に関する証言は，管見の限り見当たらない。しかし国史関連の講義については，後に母校早稲田大学の西洋史教授となった定金右源二が，折に触れて回顧している。定金は『吉田東伍博士追懐録』に「教壇上の故博士を懐ふ」を寄せ，定金が入学した明治42年

(1909) 4月以降の国史の講義風景を記している。定金ら受講生は3年生になると，毎月論文提出を課せられたが，東伍はそれらの論文を懇切丁寧に添削し，必ず末尾に総評を書き添えて返却していたという。定金はその姿勢を，「真の意味の偉大な教育家」として讃えている[58]。

また定金は，国史（古代史）の講義内容について興味深い逸話を残している。それによれば東伍は，同じく史学科系に勤務していた歴史学者久米邦武の著作に基づいて古代史を論じた上で，「遠古のアジア大陸との交通につき得意の地理的考証」[59] を述べたとのことである。とりわけ「得意の地理的考証」という定金の表現に，東伍が国史の講義であっても，しばしば歴史地理的な考察を披瀝していたことが読み取れるのである。

さて，以上のような教育活動を行った東伍には，その歴史地理学の方法を受け継ぐ者はどれほど存在したのであろうか。次章において，その点を検証したい。

Ⅳ．後継者に関する考察

本章では，東伍の歴史地理学が誰に，どこまで継承されていたかについて，東伍との学問的関係や方法上の連続性を考慮しつつ明らかにする。

後継者について考える際，まず早稲田大学における東伍の後任として，その地位を襲った後継者，すなわち制度的後継者を俎上に乗せる必要があろう。この制度的後継者に該当するのは，西村眞次である。一方，早稲田大学以外の場において，東伍の歴史地理学を発展させたと思われる人物にも注目しなければならない。ここでは，歴史地理学を継承した可能性のある3人の門弟，蘆田伊人・高橋源一郎・横井春野を検討することとする。

(1) 西村眞次

西村は明治12年（1879）に三重県度会郡宇治山田町に生まれ，同34年（1901）10月に東京専門学校文学部国語漢文及英文学科に入学し，同38年（1905）3月に卒業した。西村入学の5ケ月前に，東伍は文学部の史学及英文学科講師として着任しているが，西村の在学中，両者の接点がどこまであったかは不明である。西村は卒業後，朝日新聞社を経て，冨山房にて雑誌『学生』の編集に携わった[60]。

西村が歴史学者としての基礎を築いたのは卒業後の冨山房時代であり[61]，その時期に東伍との関係が深まったと考えられる。このことは西村自身が，「吉田先生は，私に取って講堂の恩師ではなかった。邸宅の内，道路の上，会合の席の恩師であった」と述べていることからもうかがえる。さらに西村は，「最近に私が先生の教を請うたのは，船と海の歴史であった。（中略）私は船に関する様々の論文を書いて，先生の批正を請うたが，先生は直きに閲読して批評をして下さった。（中略）私が『日本古代船舶研究』を分冊で出版するに至ったのは，全く先生の勧奨に基づいたのであった」[62] と述べ，東伍の影響を語っている。日本古代船舶史の研究は西村のライフワークの1つであるが，『海の歴史』（原題「瀬戸内海権史論」）や「古代の船舶の種類及び其発達」などを著した東伍の歴史学を，西村が確実に継承していると見なせる[63]。

大正7年（1918）に東伍が急逝した後，西村は東伍の後任として早稲田大学文学科史学及社会学科講師に招聘されている[64]。教え子によれば，西村が昭和3年（1928）に史学科教務主任になった際，科目編成において特に地理学の充実に努めたとのことであり[65]，歴史地理学の面における東伍の影響を感じさせるものがある。しかし西村自身の研究領域に歴史地理学は含まれておらず[66]，早稲田大学での講義科目にも地理関連は見られない[67]。したがって東伍の歴史地理学は，早稲田大学では継承されなかったという結論となる。しかしこれは東伍の教育能力の問題ではなく，

前述のように，早稲田大学における東伍の位置づけが最終的に「歴史学教員」であったという外的要因と大きな関係がある。東伍の歴史学は，後任の西村によって大学教育の場で継承されていくこととなったが，東伍の歴史地理学は制度的には継承されず，それが早稲田大学の伝統となることはなかったのである。

以下においては，東伍の歴史地理学を継承し，それを早稲田大学以外の場において発展させた可能性のある人物を検討する。

(2) 蘆田伊人

蘆田伊人は，明治10年（1877）に福井市に生まれた。長じて福井県尋常中学校に入学し，そこで教諭の職にあった高橋健自の影響を受けて歴史地理学に興味を抱いたという。同校を卒業後，はじめ国学院に入学し，明治33年（1900）4月に東京専門学校文学部史学及英文学科に転学した。ここで明治33年1月より講師の任にあった喜田貞吉より「地理の講義を聴き」，同34年（1901）5月からは「吉田博士に就て国史学を学」び，同37年（1904）3月に改称後の早稲田大学を卒業した。卒業後は一時青森県立中学校に教諭として勤めたが，明治39年（1906）には東京帝国大学文科大学史料編纂掛に就職している。明治44年（1911）に史料編纂掛を退職した後も三井男爵家遠祖史料の調査研究，江戸時代の大名領地や帝室御料地の沿革調査など，さまざまな歴史および地誌的調査に携った[68]。

東伍と蘆田とを結ぶ線は，実は蘆田が東京専門学校に入学する以前の福井県尋常中学校時代にある。明治28年（1895），前述の高橋健自が発案した『沿革考証　日本読史地図』の編集が進んでいたが，高橋の生徒であった蘆田が地図作成の手伝いをしており，この書は同30年（1897）に吉田東伍・河田　羆・高橋健自の連名により出版されている[69]。これが機縁となって，その後同書の改訂を東伍より委嘱され，それを大正6年（1917）に『新編日本読史地図』[70]として刊行，さらに昭和10年（1935）に大幅な改訂を加えて『大日本読史地図』[71]として刊行している。

このような背景を踏まえ，歴史地理学者である蘆田を，東伍の系譜に位置づける見解もいくつか見られる[72]。しかし蘆田は，東伍から国史を学んだとは記しているものの，地理の講義についての言及はない。また，蘆田と東伍との関係はそれほど深くはなかったという，次のような証言もある。東伍の門弟として，未完となった『国史百科大辞典』の編集助手をしていた高橋源一郎は，「蘆田さんは（中略）吉田先生とは歴史地図（『新編日本読史地図』一筆者注）の外はあまり深い関係は無かった様です。私の吉田編輯所に居った内，蘆田さんと吉田先生との往来交渉はあまり多くは無かった様です」[73]と回顧している。このためか高橋が編集した『吉田東伍博士追懐録』に，蘆田の文章はない。したがって東伍の蘆田への学問的影響については，やや慎重に検討する必要があろう。

さて，ここで蘆田の歴史地理学について考察したい。その特色は，人文地理的方法と，研究手段としての地図の重視にある。まず1点目の人文地理的方法であるが，蘆田は「歴史地理とは，時に或る人によって誤解されるやうに，歴史と地理とを唯結び付けたものでは決してない」とした上で，次のように述べる。

> 人文地理が時代的に集積されたものが，やがて歴史地理となるのであって，もしこの意味に於て研究された或る一地方の歴史地理を，時代順に水平面に切断すると仮定すれば，その切断せられた各時代の水平面は，正にその各時代の人文地理の現状を示すものと見ねばならない。[74]

ここには，歴史地理は単に歴史と地理とを結合したものではなく，あくまで各時代における人文地理の集積体であるという考え方が明確に表現されている。さらに「今日吾人が人

文地理として研究する諸要件を，その時代に遡りて研究し，その推移変遷を年代的に説明し了って，始めてそれ等の歴史地理的説明が完全したと謂ひたい」[75] としており，歴史地理学を人文地理学の方法を共有する学問として位置づけている。この点，郷土史や地方史との境界線があまり明確ではなかった東伍の歴史地理学とは，やや方法を異にしている。

2点目の特色は，歴史地理研究における地図の重視である。「地図上に於ける地形研究法」によれば，歴史地理の研究は「精確なる地図に依るの外なく，かの（歴史研究のように—筆者注）机上に記録文書を繙き，縦横研究し得るものとは，稍難しとなすの観あり」[76] としている。その上で5万分の1や2万分の1地形図などを用いて，土地の高低および傾斜面の読図を行い，歴史地理学の観点から軍略上重要な地形について考察を加えている。そして「歴史地理の研究者にして未だ地図上に於ける地形の研究の不完全なる人より，往々吾人等の耳にするところ，誠に笑ふべきこと」[77] として，地図を用いない歴史地理研究の危うさを強調している。

東伍も古地図や地形図などをしばしば活用しており，研究手段としての地図に大きな関心を寄せていた。しかし東伍は前述のように，研究手段としては文献史料が主体であり，地図の活用は蘆田ほどではなかったと考えられる。両者の地図への姿勢の違いを示す興味深い逸話が，前述の高橋源一郎により残されている。高橋は，『新編日本読史地図』編集に際しての蘆田と東伍のやりとりを回顧するなかで，「蘆田さんから，地図の解説原稿を送って来たのを吉田先生が手入れし，私に清書を言ひ付けられた（中略）此の時の蘆田さんの原稿は頗る精しかったのですが，なぜか吉田先生が非常に簡略にしましたので，私は惜しいことにと思った」[78] と述べている。読者への配慮から地図の解説文を簡略にして読みやすくしたという理由も考えられるが，東伍は蘆田ほどには地図へのこだわりをもっていなかったとの推測も成り立つ。

ところで，蘆田は歴史地理学に加えて古地誌・古地図の研究でも知られる。代表的な業績である『大日本地誌大系』全14巻（再版全40巻）は，その古地誌研究の集大成である。同大系は蘆田が各地の近世地誌を発掘・編集したものであって，なかには稀覯本に属するものも含まれており，その史料的価値は高い[79]。この点，多数の古地誌に基づいて『大日本地名辞書』を著した東伍と一見通じるものがある。しかし同大系は，主に文科大学史料編纂掛に所蔵されていた資料に基づいていることから[80]，史料編纂掛勤務時代に着想を得たものではないかと推測される。蘆田も後に「帝大の史局（史料編纂掛—筆者注）に入り，（中略）歴史地理の研究に従事せり」[81] と回顧しており，近世地誌への関心は，東伍を契機とするというよりも，この頃の歴史地理研究に伴って芽生えた可能性が高い。

このように両者の学問的関係はあまり深くなかったこと，さらに研究の方法もやや異なっていたことを考慮すると，蘆田を東伍の後継者と位置づけることは困難であると思われる。同じく高橋源一郎は「学問の関係は吉田先生よりも，むしろ喜田（貞吉—筆者注）先生の教へを受けたのではないでせうか。日本歴史地理学会にも蘆田さんはいろいろ御骨折りなさったさうですが，是等は喜田先生と早くから深い関係があったからではないでせうか」[82] と述べている。蘆田自身が述べているように，東伍から学んだのは国史学であって，仮に日本地誌の授業を受けていたとしても，その影響はかなり限定的であったといわざるを得ない。したがって歴史地理学に関しては，むしろ喜田との連続性を検討すべきであろう[83]。

(3) 高橋源一郎

高橋源一郎は，東伍に最も近かった門弟の

１人である。それは東伍の死後，『吉田東伍博士追懐録』を編集していることでもわかる。高橋は同書に一文を寄せ，「拙者はどうしても先生に頼らなければならない，先生にたよらなければこの世の中に立つ瀬がないと思った」[84] と，胸のうちを吐露している。

高橋は，明治14年（1881）に千葉県山武郡の農家に生まれ，長じてからは５年間小学校の教師を勤めた後，最初哲学館（後の東洋大学）に入って哲学を学び，その後早稲田大学に転じて東伍に学んだ。早稲田大学に入学した時期は明らかではないが，おそらく明治36年（1903）９月ではないかと推測される。高橋は卒業と同時に，東伍の牛込矢来町の『大日本地名辞書』編集所に就職したとされるが，東伍が牛込矢来町に引っ越したのは，明治38年（1905）３月のことである[85]。高橋は同39年8月に高等師範部歴史地理科での３ケ年の就学期間を終え，そのまま編集所に入ったのではないかと考えられる。その後，大正３年（1914）から執筆が始まった『国史百科大辞典』の編集助手も勤めたが，同７年（1918）に東伍が急逝したため，徳富蘇峰の民友社に転じ，すでに編纂が進んでいた『近世日本国民史』のための史資料収集や編年整理に20余年従事した。民友社を退いた後は，船橋市の委嘱を受けて『船橋市史　前編』の執筆に従事した[86]。

高橋と歴史地理学との出会いは少年の頃までさかのぼるが，『歴史地理』を愛読するうちに歴史地理学に目覚め，「殊に吉田東伍先生の文を読んで（中略）土地の変遷，沿革といふことに対する甚大の興味」[87] を抱くようになったと自身回顧している。このような関心は，早稲田大学で東伍の授業を聞き，さらに『大日本地名辞書』の作業を身近で手伝うことにより深められたものと考えられる[88]。

ここで東伍との連続性を検証するべく，高橋の歴史地理学について考察する。その歴史地理学の特色は郷土史的・地方史的な色彩が強いことと，緻密な現地調査に基づくこと，そして地方経済史の重視にある。まず１点目については，その代表作『武蔵野歴史地理』に最もその特徴があらわれている。その第１冊巻頭言には，「題して武蔵野歴史地理といふと雖，必しも純正の歴史地理（ヒストリカルゼヲグラフィー）のみの記載ではない。著者の足の印したる地方にて，著者の歴史の眼，趣味の鏡に映じたものは一切を網羅した」[89] とある。同書は，武蔵野の地理的変遷の叙述を主眼としているが，同時に人物伝や古城の興廃の年代特定，神社仏閣・古墳古碑の調査など，いわば郷土史的・地方史的な側面をもあわせもっているのである。また，第３冊の序言にも同書を「百姓の子の述作したる地方史」[90] と位置づけている。

そのことは，「九十九里浜田野開拓考」といった歴史地理的な論考がある一方で，『東京府民政史料』や『船橋市史　前編』などの地方史的な著作があることでも裏づけられ，高橋の学問を地理学の一分野としての歴史地理学の枠内におさめるのは無理がある。しかし，東伍の歴史地理学にも郷土史的・地方史的性格があることは前述の通りである。さらに，地域とその変遷発達を記述するという高橋の研究方法は，東伍のそれと共通している。したがって，高橋は東伍の歴史地誌的方法を受け継いでいると考えることができる。

次に現地調査であるが，これは両者の姿勢にかなり隔たりが見られる。前述したように，東伍は文献を中心とする考証史学に基づいていたのに対し，高橋は徹底した現地調査による研究を行った。しかし，高橋がこのような考え方を抱くようになった契機は，実は東伍にある。それは，高橋が大正初年の頃，蘆田や小田内通敏らと現茨城県水海道市にある飯沼弘経寺を訪問したときの体験にあった。高橋は次のように述べる。

> 或る時茨城県の飯沼弘経寺を訪ねたことがございますが，（中略）私の恩師吉田

東伍先生の大日本地名辞書の記事が間違ってゐるといふて，一同がっかりしたことがございます。（中略）私はちょうどその時，吉田先生の編輯所に通って仕事を御手伝ひしながら教へを受けて居りましたので，恰かも我が事の様に恥しく思ひました。そこで，自分は将来，本を書く時には，必ず実地踏査をすることにしようと，この時腹の中で考へを定めました。[91]

この時，『大日本地名辞書』の記事が違っていることを恥ずかしく感じた高橋は，この後徹底した現地主義を貫くこととなる。大正5年（1916）の秋に起稿した『武蔵野歴史地理』においては，「武蔵野全部を踏破し，而して其踏破した跡だけ記載しようと決心した。一切机上の推定はやらぬことに心を定めた」とし，その決意を示している。そして「今は殆ど武蔵野全部を歩き了った。場所によっては十数回行った処もある」[92] という，現地調査しなければ書かないという姿勢のために，その第1冊が刊行されるまでに，実に12年近くの歳月を要した[93]。

この姿勢は，そのまま後年の『船橋市史　前編』にまで継承された。同書の序によれば，「凡そ市内旧町旧村の内三四人乃至七八人ずつの教えを受けぬところは殆んどございません。（中略）机上の捏っちあげは，いたさなかったつもりでございます」[94] と述べており，その姿勢に変化がないことがわかる。現地調査で収集した古記録や古文書，金石文，口碑伝承など，各種史資料に基づいて執筆した同書は，「足で書いた」と評されるに至った[95]。このように高橋は，恩師東伍の考証史学的方法に異を唱えている。しかしこのことは逆の意味で，東伍が高橋に与えた影響力の大きさを物語るものである。

また，その研究方法には，東伍の影響を感じさせる社会経済史的な色彩が濃厚に見られる。『武蔵野歴史地理』においては，「殊に筆者は地方経済生活の発達に留意し，農村の興隆と新古市町宿駅の盛衰と，交通線の変遷及び産業の変動を明かにすることを努めた」とあり[96]，地方経済史を重視していたことがわかる。この点について，『船橋市史　前編』の「旧農村地帯総説」を事例に検討したい。この「旧農村地帯総説」には，「本田場（古村）」と「新田場（新村）」それぞれの起源や景観上・社会構造上の特色が記されている。高橋はさらに，新田場の地理的条件を本田場のそれと比較して，次のように述べている。

かかる土地は我が国にては，何処も同じく，久しく棄てて顧みられなかったが，徳川時代に至って人口の増加するに従い，開墾して新らしき村に作られた。（中略）今は大東京都に蔬菜を供給する本源地の一となって，其の富は行き詰まりの本田場をしのぐこと数等である。殊に交通網の発達は是等新田場を大東京の衛星都市となさんとしつつある。[97]

すなわち近世の人口圧という社会背景によって，それまで一顧だにされなかった土地が新田場に変化し，さらに現代においては東京の近郊という地理的条件を背景に，商業的農業地帯や衛星都市として発展しているとしている。土地をとりまく社会経済環境の歴史的変化が，土地そのものの意義を変化させるという考え方は，東伍の歴史地理学に近いものを感じさせる。高橋がこの方法を東伍から学んだという確証はないものの，高橋が東伍と同様，地域や郷土を研究する際に社会経済史的な視点を重視していたことは注目に値するといえよう。

その意味において，高橋は東伍の歴史地理学を受け継いでいる研究者の1人であったと見なすことができる。

(4) 横井春野

横井春野は，高橋源一郎と同様，東伍の影響を強く受けていた門弟である。また，歴史

地理学に関しても，著書に『地理的日本歴史』や『歴史的日本地理』があり，東伍との連続性をうかがわせる。本章の最後に，横井について検討する。

横井は明治24年（1891）に東京に生まれ，同42年（1909）9月，早稲田大学文学科史学科に入学し，東伍の講筵に列した。早稲田大学では商業史を専攻するかたわら，中学時代から関心のあった能楽史の研究に没頭した。特に後者については，当時能楽研究家として名を馳せていた東伍の指導も大きかったと考えられる。早稲田大学ではあまり講義に出なかったが，東伍の国史の講義は熱心に受講したという。東伍に提出した卒業論文は，日本古代商業史に関するものであったが，「いろいろ先生から批評をえて，うる所があった」という。同時に能楽史論をまとめ，後に『能楽全史』として出版した。卒業後は東京府立第三中学校の教師や雑誌『野球界』の主筆，専修大学で教鞭（経済商業史）をとるなど，多方面で活躍した[98]。

横井の著作は多岐にわたっているが，ここで注目したいのは前述の『地理的日本歴史』と『歴史的日本地理』である。まず前者については，その著者名は東伍となっている。大正3年（1914）に刊行された同書の初版で，東伍は成立の経緯を述べている。それによれば，出版社より執筆の依頼があったものの多忙のため果たせなかったが，横井の協力を得，完成に至ったと述べる。そして内容は「予の口授に由り指示」によって横井が筆記したとしている[99]。同書は，同じ大正3年刊行の再版までは東伍の名で刊行されているが，昭和4年（1929）の増訂版以降は，横井が著者となっている。この理由について横井は，増訂版の序言で「本書は大正三年に，余が恩師吉田東伍博士の名を以て公刊したものであるが，全部余が執筆したのであった」[100]と記している。また横井による回想録でも，東伍が横井に執筆の協力依頼をした際，「『自分の思ふやうに書け』との事で一切干渉」しなかったとのことである[101]。したがって，この『地理的日本歴史』は，実質的に横井の著書であると見なせる。

本書の内容を一言でいえば，書名が示すとおり，地理的歴史学の書物である。再版の序には本書の特徴が集約されており，東伍の署名があるものの，恐らく横井が代筆したものと判断できる[102]。横井は「史上の事実は，地理と関係深いものであって，地理の知識なくしては到底解釈のつかぬ事が往々ある」と述べ，例えばなぜ頼朝が鎌倉に，尊氏が京都に，家康が江戸に幕府を開いたかを「地理学の応援」を得ることによって明らかにするとしている。その研究の目的は，あくまで「史上の事実」の解明であり，その意味では横井の歴史学的な業績とすべきであろう。

次に，もう一つの『歴史的日本地理』を検討したい。同書の序言によれば，「地理を基礎とせる日本歴史」については『地理的日本歴史』などがあるとする一方，「歴史を基礎とせる日本地理に至っては，未だ其公けにせられたるものに接せず」[103]という問題意識から，本書を執筆したとしている。すなわち，『地理的日本歴史』が歴史学に属する研究であるのに対し，地理学に依る研究を行うというのが『歴史的日本地理』の目的であることを強調しているのである。共著者は，当時早稲田大学講師であった地理学者の矢津昌永である。

横井と矢津がどのように執筆分担をしたかについては，両者の専門分野や記述内容から，おおよその見当がつく。本書は大きく「総説」と「地方誌」に分かれるが，「総説」の歴史地理的な記述については横井，人文地理については矢津，「地方誌」は主に横井が執筆しているようである。特に全体の3分の2を占める「地方誌」は歴史地誌であり，北海道を除く日本を大きく7地方に分け，それぞれの地方について府県・旧国・郡・市町村

の順に記述し，あわせて北海道・台湾・樺太編を収録している。ここに東伍の歴史地誌的方法の影響を読み取ることもできるが，その内容を精査すると，沖縄県と北海道・台湾・樺太編以外の地域の記述は，東伍の『大日本地名辞書』にかなり依拠していることがわかる。記述自体が酷似している箇所も非常に多い。そのため，横井自身の独自性がやや薄いという印象は否めない。

以上，横井の関わった2冊の著作について検討したが，結論をいえば横井を歴史地理学の後継者と見なすのは無理があるように思える。横井が残した歴史地理学的な著作は『歴史的日本地理』に限られており，横井が歴史地理学をライフワークとすることはなかったからである。横井が早稲田大学史学科に入学した当時，東伍の担当科目はすでに歴史が中心であったという点にも留意する必要があろう。横井自身，東伍の国史の授業を熱心に受講したと述懐しているように，むしろ歴史学の後継者として見なすべきであると考えられる。

V．おわりに

本研究では，東伍の歴史地理学の方法を共有する後継者群，すなわち学派の存否を明らかにすることを目的に，まず東伍の歴史地理学の特質を検討し，さらに東京専門学校・早稲田大学での東伍の教育活動という，学問の伝達過程を明らかにした。その上で，在学した4人の門弟を事例として，彼らが東伍の歴史地理学を継承したのかどうかについて検討した。

その結果，以下の5点が明らかとなった。

(1) 東伍の歴史地理学に見られる方法的特質としては，歴史地誌的・社会経済史的・考証史学的方法の3つがあげられる。

(2) 東伍は東京専門学校・早稲田大学に地理学教員として迎えられた。しかし，その後の担当科目の推移により，東伍は歴史学教員へと立場を変えていくこととなる。その結果，早稲田大学における東伍の後継者となったのは歴史学専門の西村眞次であり，歴史地理学の専門家ではなかった。このため早稲田大学において，東伍の歴史地理学が継承されることはなかった。

(3) 歴史地理学の後継者という点では，高橋源一郎をあげることができる。高橋は，東伍の歴史地誌的・社会経済史的な方法を受け継いでいたが，東伍へのアンチテーゼとして現地調査を重視した。しかしこれは逆の意味で，東伍の影響力の大きさを物語るものである。

(4) 歴史地理学者である蘆田伊人については，東伍との関係がそれほど深くなく，また方法上の共通点もあまり見られないことから，そこに学問的な継承性を見出せなかった。また，横井春野については，東伍の影響下に書かれたと思われる歴史地理的著作が1冊あるものの，それにとどまり，歴史地理学をライフワークとすることはなかった。

(5) 以上のことを勘案すると，東伍の歴史地理学の後継者が少なかったという従来の指摘は，間違っていないと考えられる。歴史地理学の後継者が少なかった要因としては，すでに述べたように東伍は早稲田大学において基本的に歴史学教員であり，地理学の面での影響力は限定的であったことや，東伍が同校に勤務していた当時，学生のなかに研究者を志す者が少なかったことなどがあげられる。したがって早稲田大学の内外を問わず，東伍が歴史地理学派を形成するには至らなかったと結論づけられる。

なお，本研究で後継者を検討するにあたり，東京専門学校・早稲田大学に在学し，在学中もしくは卒業後に東伍と接点をもった人物のみを対象とした。しかし東伍は，教育のみならず，著作を通じても大きな影響を及ぼ

していたことはいうまでもない。したがって東京専門学校・早稲田大学に在学こそしなかったものの，東伍の歴史地理学関連の著作を通じて，その方法を会得した間接的な「後継者」も，同時代に多数存在したはずであるが，それらの人物については未検討である[104]。また，在学して教えを受けた人物についても，すべてを網羅できたわけではない[105]。これらの点については，今後の課題としたい。

（日本たばこ産業㈱）

［付記］

本研究では，文献資料類の調査収集に際し，早稲田大学大学史資料センター事務長の西川昇一氏，同センター助手の木下恵太氏，ならびに新潟県阿賀野市の吉田東伍記念博物館係長の廣田正博氏に大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。なお，本稿を投稿後，島津俊之先生の「河田　羆の地理思想と実践 ― 近世と近代のはざまで ―」（『人文地理』第56巻第4号，2004年）に接しました。本研究と関連する重要な内容を含んだ論考であり，ここに付記します。

［注］

1) 岡部精一「文学博士吉田東伍君追悼録」，歴史地理31-4，1918，1頁。
2) 岡田俊裕『日本地理学史論 ― 個人史的研究 ―』，古今書院，2000，25頁によれば，日本の大学初の地理学講座が，京都帝国大学に設置された明治40年（1907）以降を「アカデミー地理学形成期・展開期」とし，それ以前を「前アカデミー地理学期」としている。
3) 菊地利夫「内田寛一教授の歴史地理学上の位置と学風」，歴史地理学紀要Ⅰ，1959，13頁，浅香幸雄編『日本の歴史地理』，大明堂，1966，2頁。
4) ①山口貞雄『日本を中心とせる輓近地理学発達史』，済美堂，1943，118～120頁。②石田龍次郎「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向 ― 山崎直方・小川琢治の昭和期への役割 ―」，地理学評論44-8，1971，535頁，545頁。
5) ①福井好行「日本歴史地理学の展開」，歴史地理学紀要Ⅰ，1959，3～4頁。②前掲4）②535頁。
6) 野澤は「学派」を，師（学派の創設者）のパラダイム（ここでは認識論・方法論の意味）を共有する科学者の集団ととらえているが，本研究でもその定義に従う。野澤秀樹『フランス地理学の群像』，地人書房，1996，11～16頁。
7) ①結城清吾「早稲田大学における地理学の系譜と伝統（一）― 吉田東伍博士と歴史地理学 ―」，研究年誌（早稲田大学高等学院）8，1963，84～101頁。②同「吉田東伍博士と地理学」，史観71，1965，15～21頁。
8) 千田　稔『地名の巨人　吉田東伍 ― 大日本地名辞書の誕生 ―』，角川書店，2003，240頁。
9) ①前掲7）①86頁。②佐藤能丸「吉田東伍」（永原慶二・鹿野政直編著『日本の歴史家』，日本評論社，1976），147頁。
10) 前掲7）②17～19頁。
11) 吉田東伍著，高橋義彦校訂・編『日本歴史地理之研究』，冨山房，1923，1～2頁。
12) 前掲11）2頁。
13) 吉田東伍『増補　大日本地名辞書　第一巻（汎論・索引）』，冨山房，1971，序言1頁。
14) 吉田東伍著，高橋義彦校訂・編『越後之歴史地理』，萬松堂新潟支店，1925，232頁。
15) 前掲8）189～192頁。
16) 前掲11）344頁。
17) 前掲11）232頁。
18) 渡辺史生「吉田東伍の生涯」，自然と文化58，1998，41頁。
19) 前掲9）②148頁。
20) 吉田東伍『生活と趣味より観たる日本文明史話』，廣文堂書店，1915，274頁。
21) 前掲11）268頁。
22) 前掲11）268頁。
23) 江頭恒治「吉田東伍博士」，経済史研究21-1，1939，51頁。
24) 中村明蔵「二十世紀初頭の熊襲・隼人研究（Ⅱ）― 吉田東伍の古代史論 ―」，社会学部

論集，2000，23頁。

25) 大久保利謙『日本近代史学の成立』（大久保利謙歴史著作集7），吉川弘文館，1988，62～92頁。

26) 前掲11）2頁。

27) 石田淑子「吉田東伍評伝」，学苑246-8，1960，33～36頁。

28) 前掲５）①4～5頁。

29) 横井春野『能楽談叢』，サイレン社，1936，296頁。

30) 高橋源一郎編『故文学博士吉田東伍先生略伝　附下利根及銚子附近の歴史地理』，高橋源一郎，1919，27頁。

31) 前掲11）231頁。

32) 前掲11）430頁。

33) 歴史学者の坪井九馬三や三上参次は『吉田東伍博士追懐録』で，『大日本地名辞書』をめぐるさまざまな批判について触れている。高橋源一郎編『吉田東伍博士追懐録』，高橋源一郎，1919，176～177頁，220～221頁。

34) 前掲11）109頁。

35) 特に『大日本地名辞書』執筆当時は，各地へ調査に赴くだけの経済的余裕をもち得なかったといわれる。谷川彰英「吉田東伍博士と『大日本地名辞書』」，国文学解釈と鑑賞67-2，2002，134～135頁。

36) 東京専門学校は，明治35（1902）年9月に早稲田大学と改称した。しかしこれは自称「大学」であり，法律的には専門学校令に基づく「専門学校」であった。名実ともに「大学」となったのは，大正7（1918）年に公布，同8年に施行された「大学令」に基づき，同9年2月に大学設置を認可されてからである。

37) 明治40年（1907）までの東京専門学校・早稲田大学の教員は，すべて講師の肩書きであった。なお，東伍は明治44年（1911）に教授になっている。

38) 当時の東京専門学校・早稲田大学の学年度は，その学年度の開始年ではなく完了年をもって表示した。したがって明治32年度といった場合，明治31年9月から同32年8月までを意味する。

39) 史学科系の変遷については，佐藤能丸「日本近代史学史における早稲田大学日本史学 ― 明治期を中心に ―」，早稲田大学史記要33，2001，73～81頁。

40) 前掲39）81頁。

41) 早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史　第二巻』，早稲田大学，1981，385～389頁。

42) 定金右源二「早稲田史学の伝統」，人文科学研究15，1954，71頁。

43) 前掲42）70～71頁。

44) 前掲41）1183頁～1206頁。

45) 早稲田大学大学史編集所『東京専門学校校則・学科配当資料』，早稲田大学，1978，162～167頁，170～171頁，173～175頁。

46) 前掲33）108頁。

47)「喜田貞吉　履歴書（早稲田大学文書5-2-25）」（早稲田大学大学史資料センター所蔵）。

48)「喜田貞吉　教員認可願（早稲田大学文書5-2-24）」（早稲田大学大学史資料センター所蔵）。

49) 前掲45）188～189頁。

50)「吉田東伍　教員認可願（早稲田大学文書5-2-125）」（早稲田大学大学史資料センター所蔵）。

51)「履歴書」（阿賀野市立吉田東伍記念博物館所蔵）。

52) 前掲45）208～210頁。

53) 前掲45）210～211頁。

54) この国史は喜田から引き継いだものではなく，明治35年（1902）4月から東伍が新規に担当したものである。

55)「明治三十五年九月　教員担任課目・学科配当表（早稲田大学文書5-17-13）」～「明治四十三年度　教員担任課目・学科配当表（早稲田大学文書5-39-19）」（早稲田大学大学史資料センター所蔵）。ただし明治39年度については資料を欠くため，科目数・時間数は不明。

56)「明治四十四年度　教員担任課目・学科配当表（早稲田大学文書5-41-62）」（早稲田大学大学史資料センター所蔵）。

57) 特に大正以降は，東伍がほとんど一人で史学科系の国史科目を担っていた。早稲田大

学大学史編集所『早稲田大学百年史　別巻Ⅰ』，早稲田大学，1990，793頁。

58) 前掲33) 145～147頁。

59) 前掲42) 73～74頁。

60) 西村の経歴については，柴田　實・西村朝日太郎『日本民俗文化大系（10）　西田直二郎・西村眞次』，講談社，1978，238～279頁。

61) 前掲60) 262～267頁。

62) 前掲33) 187～189頁。

63) 定金は，久米邦武・東伍に始まる早稲田日本史学の伝統と，西村との関係について，「国史の研究を局部的な史料の考証にのみ限らないで，広く大陸との比較および連関に於いて把握しようとすることは久米・吉田両博士のはやくから試みられた伝統であるが，（西村は ― 筆者注）これを更らに世界史的に拡大し，かつ人類学，考古学，民俗学等の該博な学識を縦横に活用し，（中略）独自の見解を続々発表」したと評しており，西村を久米・東伍の後継者と位置づけている。前掲42) 89～90頁。

64) 東伍の後任には西村だけではなく，同じく東京専門学校の卒業生で，日本古代史や思想史を専門とする津田左右吉がいた。しかし津田は，東伍が講師に就任する以前の明治24年（1891）に卒業しており，その後も東伍との学問的関係は皆無に近いと考えられることから，検討の対象外とした。早稲田大学大学史資料センター『早稲田大学学術研究史』，早稲田大学，2004，199～203頁。

65) 荻野三七彦「西村眞次博士の追憶」，史観31，1944，125～126頁。

66) 前掲60) 425～428頁に掲載の著書目録参照。

67) 早稲田大学第一・第二文学部『早稲田大学文学部百年史』，早稲田大学第一・第二文学部，1992，389～390頁。なお，西村は日本古代史，国史演習，日本文化史のほか，考古学や人類学関連の科目を担当した。

68) 蘆田の経歴については，①蘆田伊人「我が『歴史地理』の三十年を回顧して」，歴史地理54-6，1929，123～125頁，②吉田東伍著，蘆田伊人修補『大日本読史地図』，冨山房，1935，序1～3頁，③無署名「蘆田伊人氏追悼録」，歴史地理90-1，1961，77～80頁，④飯澤文夫「明治大学図書館所蔵蘆田文庫古地図コレクション」，地図情報20-3，2000，11～14頁。

69) 河田　羆・吉田東伍・高橋健自『沿革考証日本読史地図』，冨山房，1897。河田　羆・吉田東伍・高橋健自『沿革考証　日本読史地図図説』，冨山房，1897。

70) 吉田東伍『新編日本読史地図』，冨山房，1917（1923年増訂）。

71) 前掲68) ②。

72) 例えば，吉村　正『近代日本の社会科学と早稲田大学』，早稲田大学，1957，413頁。

73) 高橋源一郎「蘆田さんをなつかしむ」，歴史地理90-1，1961，81～82頁。

74) 蘆田伊人「南部武蔵に於ける最初の居住地帯に就いて」，歴史地理55-1，1930，1頁。

75) 前掲74) 2頁。

76) 蘆田伊人「地図上における地形研究法」，歴史地理17-3，1911，61頁。

77) 蘆田伊人「地図上における地形研究法 ― 石垣山関白道の研究 ―」，歴史地理17-4，1911，73頁。

78) 前掲73) 81頁。

79) 白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』，思文閣出版，2004，7頁。

80) 『大日本地誌大系』に収録された近世地誌の多くは，文科大学史料編纂掛に所蔵されていたものを底本として翻刻されている。同大系の各巻例言を参照のこと。

81) 前掲68) ②序2頁。

82) 前掲73) 81頁。

83) 蘆田と喜田は大正7年（1918）から3年間，江戸時代の大名領地調査を共同で行っており，蘆田が大学時代のみならず，その後も喜田の影響を断続的に受け続けていたことがうかがえる。蘆田伊人「大名所領地調査の追憶 ― 喜田博士追悼録 ―」，歴史地理74-3，1939，76～78頁。

84) 前掲33) 166頁。

85) 千田　稔・渡辺史生『吉田東伍　前期論考・随筆選』（日文研叢書32），国際日本文化研究センター，2003，430頁。

86) 高橋の経歴については，①佐藤堅司「高橋

源一郎氏を悼む」，史観63・64（合冊），1962，145～149頁，②前島康彦「高橋源一郎先生と『武蔵野歴史地理』」（高橋源一郎『武蔵野歴史地理　第五冊』，有峰書店，1972），巻頭言１～７頁。

87) 高橋源一郎「鳩目の歴史地理」，歴史地理54-6，1929，26頁。

88) 前掲86）②巻頭言４～５頁。

89) 高橋源一郎『武蔵野歴史地理　第一冊』，武蔵野歴史地理学会，1928，巻頭言３頁。

90) 高橋源一郎『武蔵野歴史地理　第三冊』，武蔵野歴史地理学会，1930，巻頭言１頁。

91) 前掲73）80頁。

92) 前掲89）巻頭言１～３頁。

93) 昭和７年（1932）に一応の終巻である第４冊が刊行されたが，没後に遺稿が整理され，最終的に第９冊（1973）まで刊行された。

94) 船橋市役所『船橋市史　前編』，船橋市役所，1959，序7～11頁。

95) 佐藤堅司「足で書いた『船橋市史』―高橋源一郎氏の史業―」，房総展望13-7，1959，6～11頁。

96) 前掲89）巻頭言4頁。

97) 前掲94）436～443頁。

98) 横井の経歴については，横井春野『能楽全史』，龍吟社，1917，巻末言１～３頁，同『世界商業史』，メデコ書院，1932，序1～2頁，前掲29）290～297頁，西野春雄・羽田　昶『新訂増補　能・狂言事典』，平凡社，1987，404～405頁。

99) 吉田東伍『地理的日本歴史』，南北社，1914（同年再版），序。

100) 横井春野『地理的日本歴史（増訂版）』，モナス，1929，序２頁。

101) 横井春野「故吉田東伍博士逸事」，歴史地理51-3，1928，63～64頁。

102) 文中の一人称が，東伍のよく使う「予」ではなく，横井の特徴である「余」となっており，横井の筆になるものと判断できる。

103) 矢津昌永・横井春野『歴史的日本地理』，南北社，1917，序。

104) 鶴見は，柳田国男の民俗学について，本流の民俗学からは後継者を得られず，むしろ柳田の直接の指導を受けていない異分野の研究者，思想家，作家などに受け継がれていたと指摘しているが，本研究の課題を解決していく上でも，その視点は参考になる。鶴見太郎『民俗学の熱き日々―柳田国男とその後継者たち―』，中央公論新社，2004。

105) 例えば，『大日本地名辞書』続編である北海道編を担当した藤本慶祐を検討する必要があろう。なお，藤本の専門は主に日本思想史であり，この北海道編以外の歴史地理学関連の業績は，管見の限り見当らない。